# 日本海沿岸部における中世前期の祭礼芸能に関する文化資源学的研究
# ３年度の成果報告

坐摩神社権禰宜　橋本裕之

## １　はじめに

日本海沿岸部は中世前期に淵源する祭礼芸能が今日でも数多く分布している。とりわけ王の舞や獅子舞は多数の事例を擁する福井県のみならず石川県や富山県にも伝承されており、地域社会に定着して個性的な民俗芸能に発展している。本研究は中世前期の祭礼芸能が各種の文化資源として機能している様態を分析する。実際は①教育資源としての祭礼芸能、②地域資源としての祭礼芸能、③学術資源としての祭礼芸能、④復興資源としての祭礼芸能という四つの項目を設定した。３年度の内容は以下のとおりである。

①教育資源としての祭礼芸能。福井県三方郡美浜町宮代に鎮座する彌美神社の王の舞を美浜中央小学校における生きた教材として活用する方策を実践した。

②地域資源としての祭礼芸能。福井県の越前地方に数多く伝承されている獅子渡りが地域社会における紐帯として再発見されている現状を調査した。また、富山県砺波市の旧・出町地区の本町通りで開催されるとなみ夜高まつり、富山県射水市八幡町に鎮座する放生津八幡宮の秋季例大祭が複数の地域社会を統合する役割をはたしている様相について調査した。あわせて砺波郷土資料館の特別展について調査した。

③学術資源としての祭礼芸能。福井県越前地方に数多く伝承されている獅子渡りに関して、中世前期の祭礼芸能という視座に沿って学術的な価値を検討した。また、富山県高岡市伏木一宮に鎮座する氣多神社の春季例大祭に奉納されるにらみ獅子、富山県富山市婦中町中名に鎮座する熊野神社の秋季例大祭に奉納される稚児舞、富山県南砺市上梨に鎮座する白山宮のこきりこ祭りに奉納されるこきりこ節についても、中世前期の祭礼芸能という視座に沿って学術的な価値を検討した。あわせて福井県立一条谷朝倉氏遺跡博物館の特別展について調査した。また、３年度は最終年度であるため、日本海沿岸部以外の各地も含めて、本研究にも深く関連する事例について幅広く調査するのみならず、関連したテーマを扱う博物館・資料館の展示についても調査した。

④復興資源としての祭礼芸能。能登半島地震の被災地において、中世前期の祭礼芸能が精神的な紐帯として機能する方向性を検討した。石川県鳳珠郡能登町宇出津に鎮座する八坂神社のあばれ祭、石川県七尾市石崎町に鎮座する石崎奉燈祭、石川県石川県七尾市中島町藤瀬に鎮座する藤津比古神社の新宮祭に関する現状を調査した。あわせてのと里山里海ミュージアムの企画展・石川県立歴史博物館のテーマ展について調査した。

福井県・石川県・富山県の北陸３県は浄土真宗の影響が強いため個性的な民俗があまり見られないと考えられてしまいがちであるが、実際は中世前期の祭礼芸能に関する痕跡が数多く残されている。本研究はこれまで看過されてきた日本海沿岸部の芸能文化がはたす役割を再評価するという意味において、新規性、萌芽性、独創性を十二分に持っていると考え

ている。日本海沿岸部における中世前期の祭礼芸能が地域社会に定着して個性的な民俗芸能に発展している消息を描き出すことによって、こうした祭礼芸能を各種の文化資源として評価した上で実際に活用する方法の可能性を提案することができる。したがって、学術的な成果のみならず社会的な活動に発展する実践的な効果が期待される。以下、①～④についてくわしく報告しておきたい。

２　教育資源としての祭礼芸能

福井県三方郡美浜町に分布する王の舞は、彌美神社・宇波西神社・織田神社という三つの祭礼に奉納されており、各々が美浜中央小学校・美浜西小学校・美浜東小学校の祭礼学習において教育資源として活用されてきた。報告者は長年にわたって講師として各小学校に出向いて、王の舞や獅子舞に代表される中世前期の祭礼芸能が持つ意義について講義しており、こうした祭礼芸能が地域愛を涵養する手がかりとして重要であることを確認している。

３年度は美浜町教育委員会や美浜町歴史文化館とも討議を重ねながら、福井県三方郡美浜町宮代に鎮座する彌美神社の王の舞を美浜中央小学校の祭礼学習において教育資源として活用するべく現地調査を実施した。実際は美浜中央小学校において弥美神社の祭礼と芸能に関する授業を実施した上で、祭礼当日も６年生に対して適宜解説することによって、王の舞のみならず獅子舞をも生きた教材として活用する方策を実践することができた。

美浜中央小学校における祭礼学習

弥美神社の祭礼における六年生

３　地域資源としての祭礼芸能

福井県の越前地方に数多く伝承されている獅子渡りは、中世前期に淵源すると考えられる。３年度は福井県の越前地方に数多く伝承されている獅子渡りの個別的な状況を把握するべく、福井県南条郡南越前町堂宮に鎮座する鵜甘神社の祭礼に奉納されるオシッサン、福井県福井市冬野町に鎮座する猿田彦神社の祭礼に奉納されるオシシサマ、福井県丹生郡越前町天王に鎮座する八坂神社の祭礼に奉納される獅子渡り、福井県鯖江市南井町に鎮座する片上神社に奉納される獅子舞、福井県越前市山室町に鎮座する白山神社に奉納される獅子渡り、福井県越前市南坂下町に鎮座する白山神社に奉納される獅子返しについて現地調査を実施した。従来こそ中世前期の祭礼芸能に関係する事例として考えられていなかったが、いずれも中世前期の代表的な祭礼芸能である王の舞と獅子舞が地域社会に定着して特

異な形態に変容した可能性を想定させるものである。

また、福井県福井市灯明寺に鎮座する白山神社の祭礼に奉納される天狗、福井県福井市西木田に鎮座する木田神社のふくい祇園まつりに奉納される猿田彦についても現地調査を実施することによって、越前地方における王の舞の発展形として考えられるかどうかを検討した。その当否を現時点で判断することはむずかしい。だが、こうした事例が今日でも地域社会における紐帯として機能していることは強調しておきたい。

３年度は富山県砺波市の旧・出町地区の本町通りで開催される砺波夜高祭り、富山県射水市八幡町に鎮座する放生津八幡宮の秋季例大祭についても調査した。となみ夜高まつりは夜高じたい中世に遡るわけでもないが、夜高の主役である行灯がレンガクとも田楽とも呼ばれており、中世前期の代表的な祭礼芸能である田楽の演目である高足の形状に由来すると考えられる。放生津八幡宮の秋季例大祭は曳山と築山が斎行されており、曳山に登場する箱獅子が中世前期に遡ると考えられる。こうした事例は今日でも複数の地域社会を統合する役割をはたしており、現代社会における地域資源として機能している消息に接近することができた。

あわせて砺波郷土資料館の特別展のみならず、北陸３県に分布する中世前期の祭礼芸能に関連したテーマを扱った、となみ散居村ミュージアム・出町子供歌舞伎曳山会館・野々市市郷土資料館・勧進帳ものがたり館・北前船の里資料館・富山市民俗民芸村民俗資料館・海と渚の博物館・津幡ふるさと歴史館・小矢部ふるさと歴史館・・城端曳山会館・五箇山民俗館・津沢あんどんふれあい会館・美浜町歴史文化館などの展示についても調査した。

鵜甘神社のオシッサン

猿田彦神社のオシシサマ

八坂神社（天王）の獅子渡り

白山神社（山室町）の獅子渡り

放生津八幡宮の箱獅子

砺波市郷土資料館

４　学術資源としての祭礼芸能

福井県越前地方に数多く伝承されている獅子渡りに関して、中世前期の祭礼芸能という視座に沿って学術的な価値を検討した。その成果は令和６年（2024）12 月 8 日に美浜町歴史文化館で開催された令和６年度第４回みはま歴文講座「若狭の王の舞と越前の獅子渡り」として口頭発表している。その概要を紹介しておきたい。

若狭を代表する民俗芸能といえば王の舞だが、越前を代表する民俗芸能は何だろうか。にわかに思いつかないという向きも多いだろうが、私は最近、年来の懸案だった越前における王の舞の消長を追跡しており、こうした過程において越前に数多く伝承されている獅子渡りこそが、越前を代表する民俗芸能として高く評価されるべきだろうと考えるようになった。しかも、若狭の王の舞と越前の獅子渡りはいくつかの特徴を共有しており、両者が芸能史的にも深く関わっている可能性を想定することができるのである。本講演は従来まったく別個に考えられてきた若狭の王の舞と越前の獅子渡りの関係を再検討して、願わくば両者を架橋する試みである。

また、富山県高岡市伏木一宮に鎮座する氣多神社の春季例大祭に奉納されるにらみ獅子、富山県富山市婦中町中名に鎮座する熊野神社の秋季例大祭に奉納される稚児舞、富山県南砺市上梨に鎮座する白山宮のこきりこ祭りに奉納されるこきりこ節についても、中世前期の祭礼芸能という視座に沿って学術的な価値を検討した。あわせて福井県立一条谷朝倉氏遺跡博物館の特別展について調査した。

また、３年度は最終年度であるため、日本海沿岸部以外の各地も含めて、本研究にも深く関連する事例について幅広く調査するのみならず、関連したテーマを扱う博物館・資料館の展示についても調査した。実際は静岡県周智郡森町に鎮座する天宮神社の十二段舞楽、岩手県下閉伊郡普代村第卯子酉に鎮座する鵜鳥神社の鵜鳥神楽、鹿児島県日置市日吉町日置に鎮座する八幡神社のせっぺとべ、兵庫県美方郡新温泉町浜坂に鎮座する宇都野神社の麒麟獅子舞、三重県四日市市富田に鎮座する鳥出神社の鯨船行事・石取祭、兵庫県赤穂市坂越に鎮座する大避神社の船祭り、香川県香川県観音寺市八幡町に鎮座する琴弾八幡宮の一つ物などについて調査して、中世前期の祭礼芸能という視座に沿って学術的な価値を検討した。

また、前述した獅子舞の変異体であると考えられる虎舞をも視野に収めるべく、神奈川県

横須賀市西浦賀浜町に鎮座する為朝神社の虎踊、香川県さぬき市津田町津田に鎮座する荒魂神社・石清水神社の寺町虎獅子、香川県高松市鬼無町山口（神高）の神高神楽、香川県さぬき市大川町富田中に鎮座する富田神社の筒野虎獅子、香川県東かがわ市東かがわ市三本松に鎮座する恵美須神社の三本松虎獅子について現地調査を実施した。

あわせて中世前期に淵源する祭礼芸能に関連したテーマを扱う東京国立博物館・横須賀市立博物館・横浜人形の家・奈良大学博物館・奈良国立博物館・國學院大學博物館・四日市市立博物館・桑名市博物館・東かがわ市歴史民俗資料館・三豊市詫間町民俗資料館・考古館などの展示についても調査した。また、学術資源としての祭礼芸能に関する文献を収集するさいは、香川県立図書館・西尾市岩瀬文庫を利用した。

氣多神社のにらみ獅子

熊野神社の稚児舞

白山宮のこきりこ節

天宮神社の舞楽

宇都野神社の麒麟獅子舞

琴弾八幡宮の一つ物

５　復興資源としての祭礼芸能

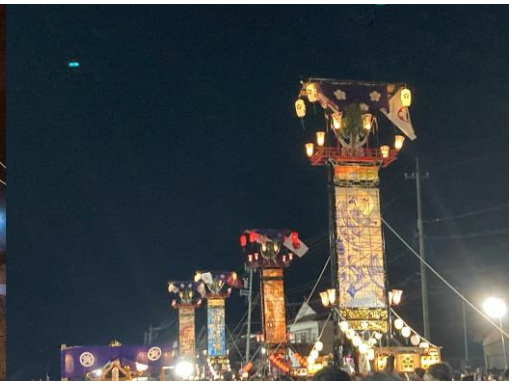
令和６年１月１日に発生した能登半島地震は福井県・石川県・富山県に伝承されている民俗芸能にも甚大な被害をもたらした。報告者はかつて東日本大震災によって甚大な被害を受けた岩手県沿岸部の民俗芸能を再生させるべく、日本財団や日本ナショナルトラストなどの助成を被災地に仲介する中間支援に従事した。くわしくは橋本裕之『震災と芸能―地域再生の原動力―』（追手門学院出版会、2015 年）を参照してほしいが、こうした団体のみならず被災地の学芸員や神職とも連携して、能登半島地震によって被災した民俗芸能を支援する活動の方向性について検討した。

中世前期に淵源する祭礼芸能も各種の文化資源として機能している様態を喪失してしまいかねないという意味において、きわめて危機的な状況に置かれている。本研究においてもこうした事態を的確に把握した上で、適正に対処することが喫緊の課題であると考えたため、３年度は能登半島地震を受けて、当初の計画を変更して復興資源としての祭礼芸能という新規の項目を追加した。

実際は石川県鳳珠郡能登町宇出津に鎮座する八坂神社のあばれ祭、石川県七尾市石崎町に鎮座する八幡神社の石崎奉燈祭、石川県石川県七尾市中島町藤瀬に鎮座する藤津比古神社の新宮祭に関する現状を調査した。藤津比古神社の新宮祭に登場する多数の猿田彦は、２年度に調査した石川県石川県七尾市中島町宮前に鎮座する久麻加夫都阿良加志比古神社のお熊甲祭に登場する多数の猿田彦とも同じく、中世前期の代表的な祭礼芸能である王の舞の系譜に位置付けられると考えられる。こうした事例は今日でも複数の地域社会を統合する役割をはたしているから、どちらも復興資源としての祭礼芸能という視座を高める上でも大きな意義を持っている。あわせて七尾市・珠洲市における神社の被災状況のみならず、のと里山里海ミュージアムの企画展・石川県立歴史博物館のテーマ展についても調査した。

以上を念頭に置いて、能登半島地震後に危機的状況に置かれた中世前期の祭礼芸能に関する長期的支援のための現地調査を実施して、中世前期の祭礼芸能が能登半島地震の被災地において精神的な紐帯として機能する可能性を検討した。だが、現状はきわめて厳しい。祭礼芸能を復興資源として機能させるためにも、被災地における神社を復興させることが肝要であり、依然として効果的な方向性は見通せないのが現状である。だが、今後も復興資源としての祭礼芸能という視座は手放さないでおきたい。

八坂神社（宇出津）のあばれ祭



八幡神社（石崎）の石崎奉燈祭

藤津比古神社の猿田彦

のと里山里海ミュージアム

６　おわりに

３年度は本研究の最終年度であるため、福井県・石川県・富山県のみならず、日本海沿岸部以外の各地も含めて、幅広く調査する機会を設けることができた。その結果として、比較研究を推進する上でも有効な手がかりが得られたと考えている。現時点で中世前期の祭礼芸能に関して予定している成果についていえば、福井県三方郡美浜町宮代に鎮座する彌美神社の祭礼に奉納される神饌を取り上げた論文「神饌が可視化するもの」は、本研究の副産物とでもいうべき成果であるが、秋道智彌編『富山の食と日本海』（桂書房）に収録される掲載されることが決定している。また、福井県において若狭地方に数多く分布する王の舞と越前地方に数多く分布する獅子渡の関係を再検討する論文「若狭の王の舞と越前の獅子渡り」、福井県小浜市奈胡に鎮座する阿奈志神社の御祭礼神事を取り上げた報告「阿奈志神社の御祭礼神事」などを準備している。

以上、本研究は日本海沿岸部における中世前期の祭礼芸能、とりわけ福井県・石川県・富山県に数多く伝承されている王の舞や獅子舞が地域社会に定着して個性的な民俗芸能に発展している消息を描き出すことをめざしている。実際は①教育資源としての祭礼芸能、②地域資源としての祭礼芸能、③学術資源としての祭礼芸能、④復興資源としての祭礼芸能という四つの項目を設定することによって、こうした祭礼芸能を各種の文化資源として評価した上で、実際に活用する方法の可能性を提案することができるだろう。したがって、本研究は学術的な成果のみならず社会的な活動に発展する実践的な効果が期待されるはずである。